



Title	2024 年度（春夏学期） 日本語Ⅰa 実践報告
Author(s)	サンジャヤ, ソンダ
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 59-60
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102683">https://doi.org/10.18910/102683</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 2024 年度（春夏学期） 日本語 I a 実践報告

### サンジャヤ ソンダ

#### 1. 授業の概要と目的

本稿は、2024 年度春夏学期の日本語 1a の授業実践の報告である。日本語 1a では、日本語学、日本における社会文化、日本語教育に関する様々な論文を講読し、講読した論文の要約を発表し、研究計画書を作成することで、アカデミックスピーキング及びライティング能力を身につけることを到達目標とした。

#### 2. 学習目標

- ①アカデミックリテラシーに関心を持たせる
- ②アカデミックリテラシーに関する理解力を高める
- ③アカデミックライティング能力を高める
- ④アカデミックスピーキング能力を高める

#### 3. 教材選択について

この授業では、特定の教材を使用せず、学生が興味を持つ論文を探して読み、読んだものを要約して発表をしたり、卒業論文のテーマを決め、研究計画の作成や研究計画について発表したりした。

論文の要約では、グループを作り、日本語学、日本語教育、日本社会文化に関する論文のうち、どの論文を読むかを各グループで決め、その論文を要約、発表してもらった。研究計画書は卒業論文のためのものであるが、実際に研究計画書として提出するものではなく、本授業では、あくまでアカデミックライティングの練習として作成した。研究計画書は個々の学生が日本語学、日本語教育、日本社会文化の研究分野のうち、研究テーマを一つ選択し、研究計画書を作成した。書き上げた研究計画書は教室で発表してもらった。

#### 4. 授業の進め方

各回の授業の進め方について以下に述べる。

【毎週の課題】他の学生が教室で発表した論文や研究計画に関して、コメントや感想を CLE に記入した後、ディスカッションする。（12 回程度）

【授業の前半】ループを決め、グループで日本語学、日本語教育、日本社会文化に関する論文を選び、選んだ論文を要約した上で発表する。

【授業の後半】各学生が日本語学、日本語教育、日本社会文化のうち、興味のある研究分野を選び、研究計画書を作成した後、教室で発表する。

【学期末課題】授業の後半で作成した研究計画書を、講師やクラスメイトからの意見を参考に書き直したものを学期末課題として提出する。

表 1 授業で扱ったテーマ

1	オリエンテーション（春・夏学期）
2	論文の要約の発表（講師が発表する）、発表グループの決定
3	論文の要約の発表：グループ 1 & グループ 2
4	論文の要約の発表：グループ 3 & グループ 4
5	論文の要約の発表：グループ 5 & グループ 6
6	論文の要約の発表：グループ 7 & グループ 8
7	研究計画の作成、研究計画のテーマ
8	研究計画の例の発表
9	研究計画の発表①
10	研究計画の発表②
11	研究計画の発表③
12	研究計画の発表④
13	研究計画の発表⑤
14	研究計画の発表⑥

#### 5. 受講生の反応と今後の課題

本年度の受講生は、中国母語話者が 9 名、韓国母語話者が 2 名、タイ語母語話者が 2 名の合計 13 名であった。グループ発表では、準備もきちんとされており、日本語学・日本語教育・日本社会文化に関する論文のうち、選択した論文のテーマも

全部興味深いものであった。発表後は、発表を聞いていた学生の中には、挙手して質問をしたり、意見を述べたりする学生もいれば、CLE に意見や感想を記入してから、ディスカッションの時間に発表のフィードバックをする学生もいた。受講生は、他の学生による論文発表の際、授業を積極的に受けている様子が見られた。

春学期の後半の授業においては、個々の受講生が興味を持っている研究分野でテーマを決め、研究計画書を作成した後、発表するという形で授業を実施した。受講生は皆、様々なテーマに関する研究計画書を作成し、わかりやすく発表することができた。受講生が作成した研究計画書について発表し終わった後、前半のグループでの発表の時と同じように、他の学生が質問したり、意見を述べたりする様子が見られた。また、多くの学生は、CLE に発表に関する意見や感想を書いた後、口頭でも伝えていた。

学期を通して、学生の授業への参加態度から、受講生が常に積極的に授業を受けていると感じられた。

期末課題は、受講生が作成し、発表した研究計画書を講師や他の受講生からの意見や感想を参考にして訂正したものを提出するものである。訂正後の研究計画書は発表時よりわかりやすくなっており、卒業論文の研究計画書としては良いものができあがった。

以上、授業のプロセスや受講生の反応を述べた。受講生みんなが積極的に授業を受けていると述べたが、CLE に意見や感想を書いた後、口頭で述べる受講生の方が多かった。今後の課題としては、講師がどのようにディスカッションを盛り上げればよいかも考えて、授業計画を立てなければならないと考える。そうすれば、発表後のディスカッションの時に、質問したり、意見を述べたりする受講生がより増えるのではないかと考える。

今後、受講生が論文購読や卒論のための研究計画の作成の能力の向上に役立つことを期待する。

#### 【参考文献】

関崎博紀（2016）「接触場面初対面会話における話題スキーマー日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31, pp.17-32